

# 「家がいいね」 第166号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2018.3.3



## 命を使い切るための作法

私には30年来の行きつけの床屋さんがあるが、その家の90歳のお婆さんに往生の極意を14年前に教わりました。私が在宅医療を始め2年目、足腰が弱り通院が出来にくくなったので前医から紹介され引き継ぎました。長く産婆さんをされ、しっかりと考えた考えの方で、自分の夫も自宅で見取ったと言われ感心。まずその話からご紹介を。

食べられなくなり寝付いていた夫の呼吸が弱くなった時点で「先生を呼びな」と息子さんに指示し、近所の医師に診断書を書いてもらったと。息を引き取ったからの絶妙の往診だったらしい。

「作法1、『自宅でも最期まで』には司令塔が必要」  
2回目でも早くも婆さんの往診。夕に意識が無いとのこと。脳梗塞の可能性もあると救急搬送を提案したが、「いや、本人が爺さんのように家で亡くなりたいたいと言っていた。一晩でも自宅で様子を見てくれ」と息子さん夫婦に頼まれ、その意で対応したら翌朝回復しました。低血糖発作だけでした。

「作法2、意思を言い含めた副司令塔を事前準備」  
お婆さんは強いと驚きました。しかし足腰が弱り血圧血糖も高く脚も腫れて痛み、訪問のたびに私は悩み続けです。半年後お別れが急に来ました。朝の布団の中で息を引き取っていたのです。お婆さんが落ちて着いて私に連絡を入れてくれました。外来の仕事前に死亡診断のための往診をしました。

「作法3、まず周囲が落ち着き救急車を呼ばない」  
お婆さんは普段から、「延命処置はしないでな」と言い、遺言めいたことを口にしていたせいで、家族も取り乱さなかったのでしょうね。合掌。



## 本当のバリアフリーとは？

上の話に登場する近所の先生のクリニックは、昔に閉院しましたが、長い直線階段の上の2階にありました。「この坂を昇った健康な人だけ診察室に到達できるみたい」と冗談のように思いました。しかし肝心の時には、風のように患者に往診をされる先生だったようです。階段を無くした外来で車椅子でも長時間通わせ、最期は診ないという形より、どちらが親切なのか、改めて考えます。

## 身体は、最後は還すべきものだから

老衰という死亡診断名が、私の担当する中では随分増えてきました。沢山の病名があってもそのために死が訪れたのではなく、自然死⇨老衰だと考えれば、ご家族にも説明の上で記載します。

高齢になり強制的に水分や栄養を補充し続けても、身体的には体重も減る一方で、全体的な体力も衰弱に向かうことを、今はフレイルと言います。

また自然に飲んだり食べたりできなくなっても臨終が近づいた人の感覚は、決して苦しいものではないことも介護の経験から分かってきました。

人生の最終段階の意思表示は、本人を中心に、何度も話し合って決める時代になってゆきます。

周囲が「苦しいのでは」と考え、最後まで集中治療を選ぶのは、本人の決定とは異なるものです。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
メール [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)  
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可